



「見たり、聞いたり、探ったり」No.226

通算 No.378

青 木 行 雄

明けましておめでとうございます



平成最後の新年、多くの思い出を残し、
新年号を感動と感謝で迎えたい。

この写真はシンガポール・マリーナ ベイ サンズホテル25階より写した・朝日。
港には多くのタンカーが停泊していた。

平成31年元旦 青木行雄

奈良「春日大社」

御創建1250年奉祝祭に参列

(平成30年9月21日、午後5時執行)

天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも

「安倍仲麻呂」

平成最後の秋、平成30年9月21日、奈良・春日大社、御創建1250年奉祝祭が午後5時より、春日大社「リングの庭」にて、長い歴史の伝統に基づきおごそかに執行された。

当日は日本全国降水率が高く、奈良も80%の降水確率であったが、午後4時頃から雨が上がり、執行中には月が顔を出し、とぎれとぎれではあったが「春日大社」を輝らした。そして、式典祝が終わった午後8時頃からぱらぱらと雨が降り始めた。冒頭の「三笠の山に出でし月かも」の神力が感じられるひと時であった。



※色鮮やかに塗り替えられた本殿。見事と言う他ない



※夕暮に映える本殿の姿

春日大社には4つの社殿が連なって建っている。第一殿は「武甕槌命」、第二殿には「経津主命」、第三殿には「天児屋根命」、第四殿には「比売神」が祀られている。

平成30年7月に下記の案内状が届いた。

拝啓、盛夏の候、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

当社は奈良時代の神護景雲2年(768年)国の安泰と国民の幸せを願い御本殿が創建されてより大神様の廣大無辺なる御加護の下本年1250年という佳節を迎えました。

つきましては奉祝祭を左記の通り執行いたしますのでご参列相成ります様ご案内申し上げます。

平成30年7月吉日

春日大社

宮司 花山院弘匡

春日大社御創建の歴史

平城京の守り神である春日大社は、神護景雲2年(768年)11月9日、称徳天皇の命による国家事業として、御蓋山の麓の現在地に創建された。今年、1250年の嘉年にあたる。

鎌倉時代中期成立の『古社記』には「神護景雲2年(768年)正月9日茨城県鹿島神宮から武甕槌命が御蓋山の頂きに移られ、天児屋根命・斎主命をお招きした」

「称徳天皇に対し山麓に南向きに祀るようお告げがあった」とある。そして「すなわち天皇驚きて勅使を下され、地形を相(み)て、終に神護景雲2年戊申11月9日戊申寅時をもって宮柱立て御殿を造りおわんぬ」と記される。つまり天皇の命で神護景雲2年11月9日に御殿が建てられたことが示される。

同じく鎌倉中期に撰関家周辺で成立した『春日社私記』には、くだんの宣命も引用され、これを裏付ける。御創建が神護景雲2年であることは、国の中枢近くで編纂された『大鏡裏書』『年中行事秘抄』他、多数の記録に記載され、公家社会でも広く認められていた。

上記は御創建についての記録であるが、実はご祭神の御蓋山御鎮座はこれを遡り、平城遷都の頃であ

るといふ史料『神宮雜例集』も見受けられ、天平年間には春日山中の御蓋山にお祀りされていたことが確実である。

平安時代の辞書として高く評価される『伊呂波字類抄』には天平7年(735年)のこととして「都近春日山奉崇居」とある他、『万葉集』には天平勝宝3年(751年)頃、藤原氏出身の初の皇后である光明皇后が、春日祭神の日に遣唐大使となった甥の藤原清河に送った和歌があり、御創建以前に、春日祭神の祭が早春の春日野で行われていたことを示す。

加えて天平勝宝8年(756年)の『東大寺山堺四至図』(正倉院宝物)に「御蓋山」が示され、そのすぐ西に囲みがあり「神地」と東向きに記される。麓の神地から御蓋山に鎮座されたご祭神を遙拝していた時代を経て、神護景雲2年春日大社は御創建の時を迎えたのである。

奉祝祭式次第

1. 当日早旦 社殿ヲ裝飾ス

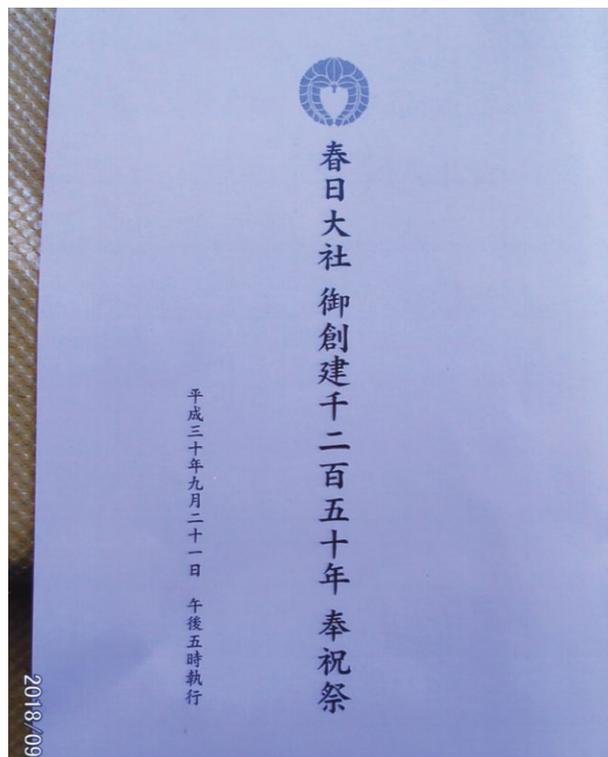
※数ヶ月前から準備が進めているが、当日も早朝から、社殿を清掃し、用意する。

2. 先 参列者所定ノ位置ニ着ク、了リテ修ノ儀アリ

※先に参列者を所定の位置に手分けして案内し、儀式が始まる。

3. 次 宮司以下祭員齋館大玄関ニテ修祓、了リテ参進

※次に宮司以下、宮司、^{ごん}権宮司他10名ほどの^{みやびと}宮人が「史上の服装に身をかため、齋館大玄関にて用意して、宮司筆頭に「リングの庭」の砂道を正列して宮殿に向かって行進する。



※当日参加者に配られた奉祝祭次第



※直会殿に参列の招待客の人々

4. 次 宮司以下祭員中間御廊ノ座ニ着ク

※次に宮司以下全員の社殿のある中間のより中に入り用意する。

5. 次 所役各御殿瑠璃之燈籠、大宮型燈籠ニ献燈ス

※それぞれの宮人が役目を実行するが、瑠璃燈・大宮型燈に火を入れる。

注 宮司以下「リングの庭」を進み神殿の前の階段を上ると参拝者はここで見えなくなり、中の様子はアナウンスにより案内があった。



※式典前の準備のところであるが、御本殿の前の幣殿の建物、「リングの庭」前

6. 次 再拝拍手

※神殿に向って拍手(2例、2拍手、1礼)
ここで全員低頭する。

7. 次 宮司御扉ヲ開キ了リテ本座ニテ候ス

※宮司一殿(一神殿)一殿～四殿まで一殿ずつ扉を開く(おごそかな行事であるが参拝者には見えない。かなりの時間を要す)
此ノ間諸員磬折・奏楽

8. 次 権宮司以下神饌ヲ供ス、此ノ間奏楽

※権宮司以下、おぜんごこくほうじょうに五穀豊穰品をのせて神前に供える行事、つまり宮司が扉を開け、権宮司他数人がお膳おぜんを供えること。そしておごそかにその時間中、神殿に奉納の楽器を奏でる。

9. 次 宮司奉幣

※宮司・神殿に奉幣する。

10. 次 宮司祝詞ヲ奏ス 此ノ間諸員磬折

※宮司祝詞を神前にあげる。

11. 次 社伝神楽ヲ奏ス

※春日大社に伝わる神楽を奏でる。

12. 次 参列者代表玉串ヲ奉リテ拝礼

※参列者代表、五撰家代表たかつかさ鷹司氏が代表して玉串を奉納する。この後全員拝礼(2礼、2拍手、1礼)

13. 次 御幣ヲ撤ス

※ 神前に備えられた、お膳を下げる行事。

14. 次 権宮司以下神饌ヲ撤ス 此ノ間奏楽

※ 四社殿の膳を一社ずつ下げる。

この間楽器を奏でる。

15. 次 宮司御扉ヲ閉ジ畢リテ本座ニ復ス

※ 四社殿の扉を一殿ずつ下げていく。

此ノ間諸員磬折・奏楽

16. 次 再拝拍手

※ 宮司以下社殿にて拍手、参拝者低頭。

17. 次 宮司以下祭員退下

※ 宮司以下全員中間から階段を降りて、「リンゴの庭」を通り退化する。

18. 次 権宮司若宮、榎本神社社参

※ 権宮司、滞りなく終了したことを若宮・榎本神社に報告する。

19. 次 古澤 巖氏 奉納演奏

※ 古澤奉納演奏に入る、バイオリンの奏者で、日本音楽コンクールで1位の持主。近年は皇室にて演奏も多い。奉納曲7曲。

20. 次 さだまさし氏 奉納演奏

※ さだまさし氏の奉納演奏、長崎市の出身、最近春日大社とのつながりが濃く、神社内での奉納演奏が多い。NHK「今夜も生でさだまさし」も人気を博している。奉納曲7曲。

21. 次 宮司挨拶

※ 宮司挨拶は別紙の通りだが、降水確率80%であったのに、月が出た事についてふれる言葉が追加された。



※ 式典が終り、「さだまさし」氏奉納演奏が始まる前の様子。小さくギターが見える

22. 次 参列者東回廊ヲ経テ中間前へ進ミ拝礼

※参列者東回廊を通り、御本殿前に進み瑠璃の燈籠等を見学し、拝礼する。

23. 次 参列者南門ヨリ退下

※参列者270名は約3時間の時を過ごし、南門前にて、神酒、記念品、直会弁当等をいただき、南門より退場し解散した。



※釣り灯籠の原型

御挨拶(宮司)

今年は春日大社にとって創建1250年を迎える、大変めでたい年であります。

神御景雲2年(768)に称徳天皇の勅命によって、左大臣藤原永手が御本殿を御創建致しました。それまでも平城京・国家国民の守護として神山である御蓋山の裾野を神地と定め祭祀を行っておりました。当地の様子は正倉院御物の地図の中にも表わされ、『続日本記』や『万葉集』などにも多く記述があります。その中には孝謙天皇が春日の祭の日の酒殿へ行幸された記録や光明皇后が宮中の紫微中台に春日大社を祀った記録もあります。



※釣り灯籠の幻想的な風景

神様をより大切に御守りし、さらには天候に左右されることなく厳粛にお祭を斎行差し上げるために御本殿が御造営されました。御本殿は青丹よし奈良の都の鮮やかな朱色の春日造であります。御創建以来、現在まで60回の御造営を重ねてまいりました。

奈良時代に創建されて以来、春日大神様の御加護の下、1250年というおめでたい節目を迎えました。大神様を崇敬される多くの方々と、さらには全ての国民の皆様と共に感謝を致し、お喜び申し上げたいと存じます。

春日大社宮司

花山院 弘匡

786年(神護景雲2年)に称徳天皇の詔により現在の地に社殿が建てられてから、2018年(平成30年)で1250年の慶年を迎えた。この節目の年をお祝いし、先ず4月から2ヶ月間の会期で、奈良国立博物館にて特別展「国宝春日大社のすべて」が開催された。全国から集められた春日美術の優品が展観され、10万人近い入館者で賑わった。

秋には9月15日(土)から24日(祝)までの10日間、境内を中心に「奉祝行事」が催行された。また「未社籠王社の再興」を行い、「開運招福・水谷神社九社めぐり」も催行された。

これら多くの行事にめぐり合え、参加出来たことに改めて感謝と幸運の思いとこれからの人生も出来るだけ多くの人の為につくしていきたいと思う毎日である。

平成30年10月8日記

